

ロビン・フッドと皮なめし屋

1 ノッティンガムに住んでいたのは

ヘイダンダンナダンダン

陽気な皮屋

アーサー・ア・ブランド

ノッティンガムの郷紳きょうしんで

歯向かえる者などおりません

2 長い槍の柄を肩に担いで

颯爽と道を行きました

二人三人敵が来れば追っ払い

足留めを食う気は毛頭ありません

3 ある夏の日のことです

駆け巡るアカシカを狩るために

陽気なシャーウッドの森に行くと

快男児ロビンに会いました

4 ロビンは皮屋に目をとめると

ちよつと遊んでやるかと思いました

そこですぐに止まれと命じ

次のように言いました

5 「おい何者だ大胆な奴

厚かましくも森に入り

どうやらおまえは盜人ぬすふとだな

王様の鹿を盗みに来たと見える

「俺はここ森番だ

王様が信頼を寄せる者

駆け巡る鹿の見張りとして

おまえを入れるわけにはいかぬ」

6 「たとえおまえが森番で

そんな命令したとしても

俺の行く手を阻みたければ

加勢の者が必要であるぞ」

7 「加勢の者など控えておらぬし

必要もない

ここにオークの枝が一本

これで十分 事足りる」

8

「剣でも弓でも何本の矢でも
決して俺は恐れはせぬ
おまえの脳天に一発お見舞いし
おまえに反吐を吐かせてやる」

「言葉使いに気をつけろ」と陽気なロビン
「もつとましな言葉を使え
その気がなければ一から作法を叩き込み
おまえの怠慢を正してやろう」

「何を ちくしょう
 い つた い 何 様 の つ も り だ
 で か い 面 を し て い て も 恐 く は な い わ
 そ の 面 直 し て 出 直 し や が れ」

ロビンはベルトの留め金をはずし
長い弓を下ろしました
硬くて丈夫なオークの枝を
その手に取って 言いました

「おまえの武器に合わせよう
 こちらに合わせる気など無かるう
 俺にもオークの枝が一本
 おまえのより半フィートと長くはないはず

「ひと勝負する前に
 武器の長さを測らせてくれ
 おまえのより長い武器など持つて
 卑怯者呼ばわりされるのはご免だ」

「長さなどどうでもよい」と快男児アーサー
「俺の武器は 極上のオーク製
ハフィート半の長さで 子牛だって一発だ
 おまえも一発で仕留めてくれよう」

「もはや我慢も限界となり
 ロビンは相手に一発お見舞い
 たちまち血が流れ出ました
 それは十時前のことでした」

アーサーは すぐに体勢たてなおし
ロビンの頭おつむに 大きな一発
髪の毛 一本 一本から
血が滴り落ちました

18 流血に気付いたロビン・フッド

その怒りは猪いのししののごとく
アーサーのすばやい攻撃は
まるで 薪を割るかのごごとく

19 命懸けで相手を追う様子は

まるで二頭の猪いのししのよう
足を腕を あらゆる体の部位を
相手の四肢を切り落とさんと

20 両者の激しい決闘は

二時間以上に及びました
一撃するたび 森が鳴る
生死をかけた接戦でした

21 「手を止めろ」とロビン・フッド

「もう試合はこれまでだ
互いの骨を粉にしたとて
一銭の儲けにもなりはせぬ

22 「陽気なシャーウッドの森の中で

これからおまえは自由に振舞え
「ざまあ見やがれ 俺は自由を勝ち取ったのだ
おまえにではなく この武器に感謝」

「おまえの職業は」と陽気なロビン

「後生だから 教えてくれ
おまえはどこに住んでいるのか
何としても知りたいものだ」

23 「おれは皮屋だ」と快男子アーサー

「長年 ノッティンガムで働いてきた
おまえが来るなら 約束しよう
ただで毛皮をなめしてやる」

「ありがたい なんといい奴

こんなに親切にしてくれるとは

毛皮をただでなめしてくれるなら

同じ分だけ お札をしよう

「ありがたい なんといい奴

こんなに親切にしてくれるとは

毛皮をただでなめしてくれるなら

同じ分だけ お札をしよう

「もしも おまえが皮屋を辞めて

一緒に緑の森に来るならば

名乗ろう おれはロビン・フッド

十字架にかけて 金と褒美をおまえにやる」

「ロビン・フッドならば」と快男児アーサー

「おまえの言うことを信じるぞ

さあ 握手だ 俺はアーサー・ア・ブランド

ずっと共に暮らしてゆこう

「教えてくれ リトル・ジョンの居場所を

何としても知りたいのだ

俺たちは 母方繋がりの血縁の者

ジョンは俺の近縁の者」

ロビン・フッドは角笛を吹き

甲高く 大きな音を響かせました

リトル・ジョンは緑の丘を駆けて

すぐに姿を見せました

「如何なる用で」とリトル・ジョン

「お頭かしら どうか教えてください

なにゆえ 枝を手にして立つておられる

何か悪い出来事でも」

「ああ この男に命じられて立つて いる

傍らにいるのは皮なめし屋

この男は剣の達人 おまけに商売の達人だ

俺の毛皮をなめしてくれた」

「そんな芸当を持つとは」とリトル・ジョン

「まことに賞賛に値するもの

この男が屈強ならば ひとつ勝負を申し込み

俺の毛皮もなめしてもらうぞ」

32 「そんな芸当を持つとは」とリトル・ジョン

「ああ この男に命じられて立つて いる

傍らにいるのは皮なめし屋

この男は剣の達人 おまけに商売の達人だ

俺の毛皮をなめしてくれた」

「そんな芸当を持つとは」とリトル・ジョン

「まことに賞賛に値するもの

この男が屈強ならば ひとつ勝負を申し込み

俺の毛皮もなめしてもらうぞ」

31 「ああ この男に命じられて立つて いる

傍らにいるのは皮なめし屋

この男は剣の達人 おまけに商売の達人だ

俺の毛皮をなめしてくれた」

「ああ この男に命じられて立つて いる

傍らにいるのは皮なめし屋

この男は剣の達人 おまけに商売の達人だ

俺の毛皮をなめしてくれた」

33 「止める 止める」とロビン・フッド

「聞くところによると

この男は善良なヨーマンで

アーサー・ア・ブランド おまえの縁者」

34 リトル・ジョンは武器を捨て
できる限り遠くに 武器を投げ捨て
アーサー・ア・ブランドに駆け寄って
その首に腕を回しました

35 お互いに誠意を尽くして相手を敬い
素直に気持ちを表して
親しみ深く 互いを見つめ
感激の涙を流しました

36 ロビンは両者の手を取って

「俺たち三人の陽気な仲間 陽気な仲間
そうだ 三人の陽気な仲間

37 「これからもずっと 生きてる限り

三人 ずっと一心同体

森はこだまし 恋女房はうたう

ロビンとアーサーとジョンの歌」

(吉田有紀訳)

37